俳句

大津俳句会

せせらぎを覗(のぞ)いてをりしつくづくし　井芹眞一郎

日を乗せて初蝶の白きらめけり　秋山　恵子

朝の日に抱かるる如く辛夷(こぶし)咲く　市原　初女

鮑(いかなご)子の佃煮届く姉元気　大塚喜久子

思い出の中に土筆と友の声　佐賀　久子

阿蘇五岳超えて遥かへ雁帰る　松尾　昭雅

嬰(やや)の手にこぼるる程の雛あられ　岡崎　浩子

母の待つ部屋やはらかく春障子　森山美穂子

啓蟄や人の世いまだ疫病中(えやみなか)　佐澤　俊子

俳句

つのはな句会

春日和　切手一枚ほどの夢　上杉　波

啓蟄や若者ぞろり不眠都市　矢嶋　道子

早春を楽しむ車　脱炭素　水野　春子

白梅が静かにさいて　鳥のこえ　梅木トキエ

蕗の薹思い出ら・る・ら生きてゆく　塚本　洋子

純白という濃さびっしりと梅日和　栄田しのぶ

辛夷(こぶし)咲く　国難に起(た)つ君等の背　志賀　孝子

耳という不思議な形三月来　田上　公代

焼香の指に寂寥(せきりょう)春あかね　木庭　杏子

俳句

大津短歌会

朝焼けの色変わりゆきあかねさす緋色となれる阿蘇の山脈　鞍　岳志

雨音も独りの室の賑いと吾は聞きつつうたに親しむ　管野　静

寒続き餌なきか鵯(ひよ)の一羽来てテラスに暫しレタス啄む　豊岡ミツル

溶けてゆく雪の下より血より濃きバラの花弁の片鱗見ゆる　坂本　杲子

焼めしに挑戦したる少年よ厨にわけのわからぬ音す　渡邊佐代子

掌に受くる間もなく消えて行く師走の空ゆ降る初雪は　吉永　恵子

コロナ禍に鶴は北へと舞い立ちぬアルプス超えの夢を抱きて　小平　善行